

肉量低下の影響で、血清クレアチニン (Cr) が腎機能を正確に反映しないことが指摘されている。

【目的】RAの腎機能評価における CyC の有用性を明らかにする。

【対象・方法】対象は1991年以後の新潟大学第二内科入院 RA で、入院時保存血清で CyC を評価できた126例。CyC はネフェロメトリー法で測定し、Cr, クレアチニン・クリアランス (Ccr) も評価した。

【結果】Cr と CyC の相関性は高かったが ($r = 0.90$), Ccr との相関は Cr より CyC が高かった。血清 Cr と CyC の異常高値を各々41例, 87例に認め、Ccr の低下 (90ml/min 未満) は80例に認めた。Cr, CyC の Ccr 低下に対する感度は、各々51%, 95%であり、同じく特異度は、各々100%, 76%であった。

【結語】CyC は Cr に比べて RA の腎機能障害を有意に感度よく検出し、有用な指標と思われた。

Ⅲ 特別講演

「膠原病と自己抗体」

京都大学大学院医学研究科臨床生体
統御医学講座臨床免疫学 教授

三 森 経 世

第74回膠原病研究会

日 時 平成14年7月10日(水)
午後6時～
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

I. 一般演題

1 腎生検後に出血傾向が出現した SLE の1例

梅田 能生・白崎 有正・伊藤 聡
中野 正明*・布施 一郎**・下条 文武
新潟大学大学院医歯学総合研究科
腎膠原病内科学分野(第二内科)
新潟大学保健学科*
同 輸血部**

66歳女性。2001年1月にSLEと診断され、同年11月2日、精査加療目的に当科に入院した。入院時、APTT, PTは正常であり、IgG型抗カルジオリピン抗体(IgG-aCL)は陰性、DRVVTでループスアンチコアグラント(LAC)も認めなかった。腎生検施行後、後腹膜腔血腫が出現、徐々に増大し、貧血の進行が止まるまでに約3週間の安静を必要とした。生検後の再検でAPTTのみの延長が認められ、IgG-aCL陽性、ミキシングテストでインヒビターパターンであった。しかし、DRVVT再検でLAC陰性、 β 2GPI-aCL陰性、Ⅷ, Ⅸ, Ⅺ, Ⅻ因子活性は正常であった。カオリン凝固時間を施行したところ、内因系上流のインヒビターの存在が示唆された。PSL 40mg/日を開始後、APTTは短縮しIgG-aCLも陰性化した。SLEで腎生検後に出血が遷延する場合は、凝固系の再検査が重要であると思われた。

2 Shrinking lung syndrome により CO₂ナルコーシス、呼吸停止を来した SLE の1例

和田 庸子・殷 熙安・大野 司*
長岡中央総合病院内科
同 神経内科*

症例は65才女性。既往歴、家族歴に特記すべき